

令和3年7月23日

南の風 409

南部地区ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

前号の続きです。

バスケットボールのリングは、床から 3.05 cm (ミニバスは 2.60 cm) のところに水平についており、リングの直径は 45 cm という狭さです。このことはシュートの難易度が非常に高いことを示しています。特に育成年代の選手にとっては、難しいスキルになります。

ペイントエリア付近は、ディフェンスの影響を受け簡単にシュートはできません。ゴールから離れれば当然のことながらシュートの確率は落ちます。

となれば落ちたシュートのリバウンドを取ることが、バスケットボールの最重要スキルであることは言うまでもありません。

このように『なぜ、この練習をやるのか』、『何のためにやるのか』を考えることは、選手が練習に取り組むときの大きなモチベーションになるだけではなく、バスケットボールに主体的に取り組むための、大きな原動力になると思います。

さて紹介したい指導法についてです。

今年に入り、私が気になっていた話題でした。バスケットボール競技に特化した指導法ではありませんが、カオス型ボール競技には共通していくたいへん参考になる考え方です。

スペインのフットボール（サッカー）クラブ『ビジャレアル』の女子育成部のポストを担い、現在女子統括責任者兼トップ監督に就任している、佐伯 夕利子氏が提唱している指導法です。氏は現Jリーグの常勤理事でもあります。氏の著書の「**教えないスキル**」～ビジャレアルに学ぶ7つの人材育成術～は、大きな反響を呼んでいます。

ここから氏の体験や考えを紹介しながら進めます。※氏の体験や考え、著書からの引用は、ゴシック体で表記します

第1章 自分の言動に意識をもつ

ビジャレアルのメソッドダイレクターの、佐伯らコーチへ向けての言葉から

「あなたたちがどういうチームにしたいのか、どういうクラブにしたいのか。どんな指導者になりたいのか。どういう選手であってほしいのか、っていうのを自分たちでアイデアを出し合って、自分たちで決めていく。そうやってみんながある程度了解した状態でプロジェクトを進めてこそ、納得感があるから足並みがそろうし、意味が出てくるんじゃないのかな？」

これを受け、佐伯氏らコーチのディスカッションからの考え方

「指導者として、プロフェショナルだというのなら、選手のピッチ上でのパフォーマンスだけに注力していいのだろうか？」「彼らがフットボール選手じゃなくなったとき、ビジャレアルというビッグクラブの後ろ盾がなくなったときに、彼らがどんな人間になっているかというところに責任をもつそれがプロの指導者としての責務ではないか？」「彼らが華々しい状態でなくなったときに、私たちの指導の成果がはかられるべきではないか？」

続きは次号にします。